

人間の悲惨に抗うために——批判と動態的理論から

特定非営利活動法人社会理論・動態研究所 青木秀男

初期治療はするが、薬が買えない患者は放置する。ベッドだけ無料という、マニラの繁華街近くの病院である。その集中治療室のベッドで、栄養失調で枯れ枝の手足の少年が、昏睡して、か弱く、はあはあと息をする。兄と姉が、交代でゴム袋を押し、少年の喉元へ空気を送る。母が、ガーゼで紫色の唇を拭う。父が傍らで、げっそりと、その様子を見ている。

筆者の援助で、人工呼吸器を少年に装着した。呼吸器の借料は、一日二〇〇〇ペソである。まずは三日分借りる。父が、秀男が息子の命を延ばしてくれたと喜ぶ。しかし、ときすでに遅く、高熱の少年の額に汗粒が浮かび、手足がむくんで、腹に黄疸が出ている。

翌日の早朝、少年は、命に抗うのもここまでと、静かに心臓の鼓動を止めた。この世の苦痛から解放され、安らぐ少年の穏やかな顔。しかしその傍らで、父が泣き、母が泣き、兄が泣き、姉が泣く。動かない骸むくろにどう取りすが紐すがつても、少年は帰らない。慟哭する父たちをどう慰めても、少年は帰らない。

路上で生れた七歳の命は、どんな夢を奪われ、なにを悔やんで、ひとりで逝ったのか。その日の午後、隣りのベッドで、少年がもうひとり、母に看取られて逝った。

少年たちは逝った。そうではない。少年たちは殺された。酷薄な人の世に押し潰されて、殺された。この世は、見えない敵の銃弾が飛び交う戦場だった。可憐な命が、健気に夢を膨らませて、きらきらと輝き、利発な命が、懸命に貧しさと闘って、きらきらと輝いた。なのに間もなく、少年たちは、精根尽き果て、銃弾に斃れた。そんな少年たちを、だれが戦場へ送った。

病室の窓からマニラ湾を臨む。夕焼けが、忌まわしいこの世を嘆き、怒いかって、家も、車も、人もめらめらと燃えている。



フィールド・ノートを整理した小文である。昨年秋。マニラのホームレス調査の一齣である。親しく交際する（元）ホームレス家族の話である。昨年夏から、行政が斡旋したスラムの小部屋（一畳半）に住む。家賃は、月に二〇〇〇ペソである。滞納が続き、家主にあと二ヶ月と通告されている。家賃は払えず、子が病気になれば、たちまち路上へ舞い戻る。少年は、九人きょうだいの三男坊だった。みな路上で生れた。学校は行っていない。一番下は二歳の男の子。その上は三歳の女の子。四歳と一一歳の男の子。四〇歳の父は、トライシクル（客席付き自転車）の運転手だったが、それを売って、駐車場の車の整理員をする。三八歳の母は、小金があるときは花を仕入れて、市場の前で売る。二〇歳の長男は、あれこれの手間仕事を探して奔走する。一九歳の長女は、物売りの夫との子をもう直ぐ出産する。一五歳の次女と九歳の三女は、ナイトクラブやキャバレーの前で薔薇を売る。親と子があれこれの小銭を稼いで、ようやく家計を支える。・・・飢えに耐えて、懸命に暮しを凌ぐ家族である。その背後に、マニラの路上やスラムで苦闘する無数の困窮者の群れがある。

私の *Doing Sociology* を記す機会をいただいたことに、お礼を申し上げます。筆者が所属する研究所とその理念について、少し論述したい。

騙しと闘い

フィリピンにも日本にも、人間の悲惨が尽きない。理不尽な境遇にあつて飢える人、傷つく人、殺される人。すべて人間社会の仕業である。しかも悲惨は、命のリスクに留まらない。支配（と抑圧）の神は老獺である。ウェーバーは書いた。悪魔は年老いていると。貶めを労りと、排除を包摂と、不幸を幸福と思ひ、支配の神を救済主と崇める犠牲者もいる。支配の神は、身も心も、人間丸ごと奪い取る。犠牲者に優しく寄り添ひ、社会の片隅に犠牲者を幽閉して、廃棄する。そのこととときには、犠牲者も気づかない。アルチュセールは、国家を対象に、そのような支配の奸智をイデオロギー装置と呼んだ。現代日本で、優しい言葉が溢れている。そして、

支配が巧妙に隠蔽されている。

ついでに国家の話の一つ。新自由主義のもと、国家は、行政機構を縮小した。その行政機能を市民団体が代行している。筆者が研究するホームレス世界も、同様である。行政は、ホームレス問題の「解決」(処理)をNPOに委ねる。そうすることで、コストとリスクを縮減する。NPOは、ホームレス援護の実務をこなす。その結果、ホームレスは路上から消え、アパートやドヤに収まる。こうして、ホームレス問題が「解決」して、支配は完結する。この過程で、優しい言葉が溢れる。ホームレスも人間なのだ。命を大切に、命に寄り添おうと。

他方で、ホームレスを援護しながら、行政の意図を暴き、命の言説を剥がし、援護の意味を問うNPOがある。共同の実践をめざし、解放の理念を追うNPOがある。NPOは、行政機構の延長なのか。それとも、ホームレスの避難所であり、砦なのか。問題の偽装の完結か、問題の豊饒な展開か。その選択の間には、激しいイデオロギーの闘争がある。グラムシは、それを(社会変革のための)「陣地戦」と呼んだ。

事情は、研究世界も同じである。人間の悲惨を隠蔽するのか、暴くのか。その対立はいつも自明でない。どちらも論の正当性を主張する。しかし、正当性判断の条件は三つある。どれが欠けてもいけない。一つ、相互批判である。それにより、正当性の論拠が明確になる。二つ、批判の現実還元(または参照)である。それにより、批判と現実の整合性が明確になる。三つ、全体的・構造的視点である。それにより、眼前の現実の、社会のなかの位置が明確になる。

研究は、人間の悲惨と直接に闘う社会運動ではない。しかし、研究も闘いである。悲惨の構造を暴くことも、悲惨の行方を予見し、解決の条件を示すことも、闘いである。デュルケームは書いた。社会学は予見するために見ると。研究(認識)と運動(実践)は、一方なくして他方もない、悲惨との闘いの両輪である。

研究所

一九九〇年に「都市社会学研究所」を立ち上げ、二〇〇七年に「社会理

論・動態研究所」へ衣替えし、その後、若い所員の発案で、一〇年に特定非営利活動法人になり、一二年に文部科学省の科学研究費交付資格団体の認定を受けた。現在、専任者（無給）と全国二九大学の兼任者、外国人の四六名の研究員を迎えている。研究紀要『理論と動態』は八号を重ね、今年英語版 *Social Theory and Dynamics* (STAD) 創刊号を刊行した。研究テーマにタブーはなく、投稿論文には、理論と実証、および問題意識（なんのための論文か）を求める。厳格にかつ丁寧に査読し、投稿者と査読者・編集者が納得いくまで、リライトを重ねる。小さい研究所ならではの、否、だからこそ必要な取り組みである。研究所員は学歴を問わず、上記紀要に論文を掲載するまたは同等以上の力量がある人を迎える。四つの研究会を重ね、これまで、七名の大学院修了者と在野研究者が、科学研究費補助金を取得した。問題意識が鮮明で、力はあるが金がない若手研究者に、研究の機会を提供する。そのような形で、研究所が、日本の社会学に少しでも貢献できているなら、幸甚である。

社会学と批判

研究所の設立は、(日本の)社会学への危機意識に発する。筆者はかつて、不遜にも「人間主義の旗印を掲げ、主体性を謳歌する現代社会学は、現象学的社会学であれなんであれ、(中略)パラダイムのラディカルな転換を主張しながら、実は、肝心な所で、当の(人間の悲惨の)状況から自らを隔離してはいまいか」と書いた(『社会学評論』三三巻四号)。冷や汗である。その後、社会学はどうなったのか。浅学の筆者に、社会学を眺望し、裁断する力はない。しかし苛立ちは消えない。たとえばここに、「社会学の復興をめざして」と題する報告(日本学術会議社会学委員会 二〇一四年)がある。そこには、つぎのようにある。社会学理論には、社会のあり方を見直し、社会の変革の道筋を示すミッションがある。その遂行は、グローバル化とリスク社会化のなかで、ますます重要になっている。「とくに日本社会は、東日本大震災を経験するなか、そこから得た教訓を定式化し、世界に対して有益な何らかの一般理論として提示することが求められている」。そのために、現実問題の全体的な認識と、それを可能にする

学際的協働が緊喫の課題になっている。

しかし日本の社会学に、世界に対して有益な一般理論が発信できたろうか。寡聞にして筆者は、その片鱗さえ知らない。その前に、「見直す」「変革」とは、なにをどうなのか。言葉が「グランド・プロブレム」「グランド・デザイン」と続くと、ああそういうことかと思う。報告は、「規範的・政策的な構想」に基づく「政策立案」「社会の設計」という。ちょっと待ってほしい。最初に「政策」なのか。社会は「デザイン」「設計」の対象なのか。社会学理論はそのためにあるのか。社会学理論をどのように整理しようと、言葉の軽さは書き手の社会学観を暴露する。社会の設計のはるか手前に、人間の恣意を容易に許さない、深く重い社会の現実がある。まずは、そのことに畏怖すべきである。社会学の距離を感じるばかり。

研究所は、動態的理論を謳い、その実践をめざす。動態的理論とはなにか。動態的とは、乗り越え、乗り越えられる様をいう。理論の乗り越え・乗り越えられるは、批判によるしかない。ゆえに、動態的理論の神髄は、批判にある。では批判とはなにか。社会（科）学には、批判それ自体について、論争の歴史がある。たとえば、ホルクハイマーの批判的社会理論からハーバマスのそれへ、また、批判的社会理論とポパーらの批判的合理主義との実証主義論争。そのなかで、批判の意義と機能が問われてきた。筆者は思う。批判は、認識の妥当性を問う。つぎに、その妥当性の意味を問う。そのなかで真実が見えてくる。批判の至高の参照枠は、現実である。それにより真実が確定される。これをつぎのように言い換えよう。この世には、人間が傷つき、殺される悲惨がある。その現実は、どのように認識されるのか。その現実は、どこから来たのか（背景と経緯）。どうなるのか（帰趨と結果）。どうできるのか（変革可能性）。これらすべての問いに、批判が介在する。批判が、前の問いを現実に曝し、つぎの問いを惹起する。こうして、少しずつ人間の悲惨の構造が、見えてくる。研究は、不可視の現実を可視化する。批判は、その闘いの触媒となり、羅針盤となる。批判は、認識の到達点を教え、つぎの闘いの道筋を指し示す。

動態的理論

ならば動態的理論の批判は、どうなのか。その中身はどうなのか。ここで、研究所が掲げる理念（原文は筆者による）を紹介する。それは、研究の解放的潜勢力を追究するという、特定の価値選択のもと、社会思想・社会学の批判的思考を参照し、動態的理論の理念として構成したものである。その主張に、特段の理論的なオリジナリティはない。未整理な箇所もある。しかし、動態的理論の位置は明確である。そこに一つの世界がある。



資本が世界を編成し、帝国が世界を調整する。搾取と貧困が遍在し、排除と包摂が循環する。そのような世界がある限り、人間の野蛮と悲惨は尽きない。

幻想が人間精神を支配する。人間を解放した近代理性が、その道具となる。そして世界を肯定し、野蛮と悲惨を隠蔽する。しかし人間の生は豊穡である。人間は〈よき生〉を諦めない。そして支配の^{てのひら}掌を溢れ出す。溢れた生は、支配の奸智を暴き出す。こうして、幻想世界は解体する。

支配理性と批判理性。社会（科）学は、どちらの理性を選ぶのか。野蛮と悲惨の現実を隠蔽する理性なのか、野蛮と悲惨に抗う理性なのか。動態的理論は、後者を選ぶ。

動態的理論は、理論的実践の理論である。それは三つの実践を行う。一つ、動態的理論は、支配の意図を暴き、野蛮と悲惨の原因を究明する。そして、人間解放の条件を摸索する。そのとき動態的理論は、「社会の動態」を促す〈超越的理論〉となる。

二つ、動態的理論は、時代の支配理論を批判する。現実が矛盾を孕めば、理論も矛盾を胎む。時代の力は大きく、肯定的理論の力も大きい。それは、矛盾を客観性と合理性のなかへ回収する。動態的理論は、肯定的理論の奸智を暴く。そして批判的理論を構築する。そのとき動態的理論は、「理論の動態」を促す〈創造的理論〉となる。

三つ、動態的理論は、現実と理論を批判する主体を批判する。主体も支配理性から自由ではない。主体は、容易に奸計に囚われて、現実肯定の下僕になる。動態的理論は、そのような主体の弱さを自覚する。現実を正視すれば、人間の慄きが見える。呻きが聞こえる。慄きと呻きが、動態的理論の出発点である。そのとき動態的理論は、「主体の動態」を促す〈反省的理論〉となる。

動態的理論は、問題意識（研究の意味）、理論（世界の説明）、実証（事実の証明）を必須の要件とする。研究が意味を喪失し、理論が矛盾を排除し、実証が瑣末に陥るとき、社会の理論は、人間の現実を見失う。野蛮と悲惨を合理化する。それに対して動態的理論は、意味と理論と事実に関われた積極的理論である。この「開かれた」「積極的」には、五つの意味がある。

一つ、動態的理論は、野蛮と悲惨を許さない批判的人間主義に立つ。この原点を逸れない限り、動態的理論が研究する主題に、タブーはない。

二つ、動態的理論は、内在的批判の理論である。「内在的」には、二つの意味がある。まず、現実を内から批判し、解放の潜勢力を模索する。つぎに、理論を内から批判し、理論を乗り越える。

三つ、動態的理論は、全体的認識の理論である。「全体的」には、二つの意味がある。まず、動態的理論は、普遍的理論である。社会の研究は、その断片の研究から始まる。しかし断片は、全体の端緒である。つぎに、動態的理論は、社会の全体的理論である。社会はつねに全体である。動態的理論は、〈全体的事実〉を追究する。

四つ、動態的理論は、事実に基づく理論である。理論的説明は実証を不可欠とする。しかし実証は、世界を閉じた現実と見做し、事実の整合性だけを追究する事実主義ではない（閉じた合理性）。実証は、現実の矛盾を発見し、それに理論が介入するために行う。理論は現実を解体し、現実は理論を突き崩す。理論と実証は対抗しあう（開かれた合理性）。動態的理論は、その無限循環を引き受ける。

五つ、動態的理論は、自省的認識の理論である。「自省的」には、二つ

の意味がある。まず、動態的理論は、みずからの理論に自省的である。社会（科）学は、近代認識の産物である。それは、西欧男性の創作物である。動態的理論は、そのような近代科学の出自に自覚的である。ゆえにそれは、差異的で異質な理論に開かれる。つぎに、動態的理論は、認識する主体、つまり主体のポジションに自覚的である。動態的理論は、他者の声を聞く、代弁することの困難を知りつつ、代弁する。動態的理論は、その傲慢に自覚的である。

認識と事実、断片と全体、批判と構成、主体と客体は、たんなる対立項ではない。動態的理論は、それらが交錯する場に身を置く。そして、野蛮と悲惨に介入し、人間解放の現実的・理論的条件を模索する。解放とはどんな状態なのか。解放へどんな方途があるのか。そこで研究はなにができるのか。動態的理論は未来を展望し、その展望をたえず更新する。



ポスト・モダン派は、このような研究（所）の理念は、理念という語からして、大仰な社会学の二番煎じと失笑するだろう。しかし、筆者はそうは思わない。まず、人間の悲惨は、重く厳然とした客観的現実である。そこから出発し、認識と思考を経て、幾度もそこへたち還る。そのなかで、研究になにができるかを問い、それを問うみずからを問う。それは、研究の必須条件である。つぎに、現実とはたえず変容する。研究と研究者は、それに開かれている。ゆえに、理論の動態は必然である。研究者は、現実と研究を批判し、現実と研究のなかの解放的潜勢力を模索する。さらに動態的理論は、個別の研究を究めつつ、悲惨の根源・資本主義と国家（や帝国）の実相に迫る。構築主義も「遍在する権力」論も、そのなかでの話である。

このような主張も、あながち自己陶醉ではないようである。欧米の批判社会学者から（も）、共感のメッセージをいただいた。それも励みに、研究所は、いま研究の国際化の道に踏み込んだ。国際シンポジウムの開催、国際比較研究の企画、外国誌への英語論文の投稿に始まり、今年に入り **STAD** を刊行し、アメリカの社会学誌で **STAD** を紹介いただき、その編集

委員に招かれた。さらに今年中に、同誌に研究所の企画で特集号を編集し、また、国際社会学会の一研究委員会（RC）との研究のジョイントを予定している。研究の国際化への小さな一歩である。研究所の理念と研究活動が、どこまで世界に通じるのか。研究所は、いま正念場を迎えている。そのために、日本を拠点に、世界を視野に入れ、理念の批判力と構想力を研ぎ澄まさなければならない。それは、筆者の研究人生の帰趨に関わる。